

〈研究ノート〉

アウグスティヌスの三位一体論と社会福祉の接点に関する考察

—研究ノート1—

九里 秀一郎*

要約

アウグスティヌスの三位一体論と社会福祉の接点について考察することが本研究の目的である。キリスト教の基本的な教理である三位一体論は、古代末期にアウグスティヌスによって理性と信仰にもとづき論証された。彼は、人間の精神における三位一体の類比を議論し、人間の言葉と愛の中に神の像を見出した。彼の三位一体論は信仰の現実的かつ合理的な理解に非常に有用であるため、キリスト教社会福祉学の基礎理論を考える上で貴重な資料となることが期待される。本稿では、三位一体論の第15巻1章から16章までの論証を確認した。その結果、三位一体論と社会福祉の接点として、人間の尊厳と多様性に関する具体的な表象、人間の感覚に対する慎重な側面を見出すことができた。

キーワード アウグスティヌス、三位一体論、キリスト教社会福祉

目次

1. 序論
2. 方法
3. 結果
 - 3.1 「三位一体論」第15巻の要約
 - 3.2 「三位一体論」第15巻の独立性
 - 3.3 「三位一体を探求する方法」の論証
 - 3.4 「三位一体から生まれる言葉」の論証
4. 考察
 - 4.1 聖書を論拠とする意味
 - 4.2 人間の精神を寓喩とする意義
 - 4.3 「三位一体から生まれる言葉」と社会福祉の接点
5. 結論

付録 「三位一体論」第15巻ノート1

1. 序論

キリスト教社会福祉¹にとって、キリスト教と社会福祉の関係は最も基本的な課題である。その関係は、一人の人間の信仰のレベルから、教会、国家に至るまで幅広く、壮大な歴史的背景がある。初代教会の奉仕活動は修道院の活動へと発展し、カトリックとプロテスタント分離以降の多様な慈善事業が現代も世界のいたるところで脈々と繋がっている。本研究は、このようなキリスト教社会福祉に係わる世界的、歴史的背景を踏まえ、キリスト教が成立した時期まで遡り²、アウグスティヌス³の著した三位一体論⁴を通して、キリスト教の原点にある思想と社会福祉の接点を探り、将来のキリスト教社会福祉を展望しようとするものである。

「三位一体論」はキリスト教の最も重要な教理の一つで、新約聖書にある父と子と聖霊に関する神理解である⁵。しかし、「三つにして一つの神」という考え方は分かりにくく、初代教会の時代からさまざまな論争を巻き起こし、キリスト教存亡にかかわる多くの異端からの脅威にさらされた⁶。4世紀になって初めてキリスト教の公会議が開催され、ニカイア信条⁷によって三位一体の教理が宣言されたが、その後も異論が絶えず、ヒッポの司教であるアウグスティヌスに、三位一体の厳密な説明が求められたのである。当時、これを否定するアリウス⁸や懐疑的なアカデメイア派⁹などの異論に戸惑う人々に対して、正しい三位一体論を明確に説明することが彼の使命であった¹⁰。

彼は二つの論証方針を掲げた。一つは、神が被造物を造られたならば被造物から神を知ることができるという、次のパウロの言葉である。(15:1:3)

世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができます。(ロマ1:20)

もう一つは、聖書を拠り所とすることである。

私は神の実体を、あるいは聖書をとおして、あるいは被造物をとおして、問い求めるのに怠惰ではないであろう。この聖書と被造物の二つが私たちの省察の対象として提供されているのは、この聖書に靈感を与え、あの被造物を創造された神ご自身が問い求められ、神ご自身が愛される為である。(2:序:1)

聖書と被造物をとおして三位一体の神を説明するというのが彼の論証の方針である。このことは、聖書の語る真理と自然界に存在する事実から神を問い求めることであり、真理を事実にもとづき論証する科学的な方法と言える。彼はこのことを「誰も全く知らないものを決して愛することは出来ない」(10:1:1)と明快に表現し、有名な二つの定式によって信仰と理性について説いている¹¹。「わたしたちを認識へと導く二つの強い力」について、一つは「理解するために信じなさい」、もう一つは、「信じるために理解しなさい」である。この二つは切り離すことができず、神を信仰と理性から求めることによって、はじめて私たちはごく近くに神を認識すると説くのである。

アウグスティヌスの有名な自叙伝「告白」¹²によれば、彼はマニ教からキリスト教に回心

する以前に、当時のさまざまな学問的知識を身に着け¹³、天地創造について新プラトン主義による考え方で理解していた¹⁴。しかし、これらの学問的知識は、彼が遠ざかっていたキリスト教信仰に戻るきっかけにはなったが、哲学的真理だけでは不十分であり¹⁵、最終的に聖書のパウロの言葉に促されて¹⁶キリスト教への回心に至っている¹⁷。若い頃から激しい情熱で神を求め、多くの迷いを経てキリスト教に回心し、敬虔で最も偉大なラテン教父¹⁸とよばれる信仰者となった歩みを、私たちは彼の書いた「告白」から強烈な印象を持って知るのである。

三位一体論は、カトリック、プロテスタントを問わず、現在世界にあるキリスト教会で広く認められており、アウグスティヌスの思想は信仰と理性の融合した極めて高い知的財産としての価値¹⁹を有している。わが国では、矢内原忠雄が経済学者の視点から、三位一体論が荒唐無稽な神観ではなく、哲学として十分価値があることを評価している²⁰。本研究では、矢内原忠雄と同様にテキストを忠実に読み解き、科学的な論証であることを検証し、その上で、信仰と科学の融合したキリスト教の視点に立って、キリスト教社会福祉のビジョン形成の可能性を探る、他に類を見ない試みである。

本研究の目的は、(1) アウグスティヌスの三位一体論の論証を確認すること、(2) アウグスティヌスの三位一体論と社会福祉の接点について考察すること、以上の二つである。

2. 方法

「三位一体論」第1巻から第15巻全体について可能な限り理解した上で、第15巻についてのみ全文を要約して要点を整理した。第15巻に限定するのは、主として次の理由からである。(1) 第15巻には第1巻から14巻について著者が論証した整理があり、その上で議論を加えて結論に至り、第15巻だけで形式的には完結しているように見えること、(2) 三位一体論が著者自身も語っているようになり難解であり、完成までには途中で一時執筆が中断した期間も含めて20年以上も経過していること、以上である²¹。ちなみに、著名なスイスの神学者カール・バルトによれば、三位一体の神に関する理解は第15巻の末尾に為したことが人間の限界であろうと語っている²²。

「三位一体論」第15巻は全28章、51節からなり、今回使用した日本語訳テキストでは72ページ (p.422~493) に及ぶ。要約は原則として節ごとに行った。ただし、節の途中で節を変更することなく章が変わる場合がしばしばあり、その時は節を分けて要約した。議論が継続する場合は、複数の節をまとめて要約した。要約の単位ごとに通し番号を1)から付番した。さらに全体構成を明らかにするため、複数の要約をまとめて部とし、通し番号を第1部から付番した。

3. 結果

3.1 「三位一体論」第15巻の要約

第15巻全体について要約と要点の整理作業を行った。結果はノートとして付録に添付して

ある。要約ごとのタイトル、要約を5部にまとめて付けたタイトルは付録目次として示してある。なお、本論では第1章から16章が議論の対象なので、付録はノート1として該当部分のみ収録した。第15巻全体の構成は以下の通りである。

「三位一体論」第15巻の構成

部	タイトル	要約番号	章	節
第1部	第1巻から14巻で証明した真理	1) - 3)	第1～3章	1～5
第2部	三位一体を探求する方法	4) - 9)	第4～9章	6～16
第3部	三位一体から生まれる言葉	10) - 16)	第10～16章	17～26
第4部	三位一体の愛	17) - 25)	第17～21章	27～41
第5部	三位一体を見る限界	26) - 36)	第22～28章	42～51

要約は合計36の単位になり、要約番号1)～36)を付番した。要約と要点の整理作業では次のような処理を行った。(1) 論証という観点から必要最小限のまとめとした、(2) 誤解をさけるためできるだけ訳語を忠実に使用した、(3) そのため、直訳に近いテキストの表現が引き継がれ意味不明な面もあるので要点で理解を補うよう心掛けた、(4) 多くの聖書箇所が引用されているが論証という観点から重要なもののみとした、(5) 聖書の訳は、すべて新共同訳聖書の訳とし、訳の違いに依存しないかを確認した、(6) 信仰的な記述はもともと分離されているので論証部分に混在している信仰的表現は割愛した、(7) 具体的事例を多数列挙している部分は必要最小限として一部を割愛した。

要約には相当の時間を費やし最善を尽くしたが残念ながら十分読み易くすることはできなかった。意味不明な部分は元のテキストを参照頂き、ご寛容を願いたい。

3.2 「三位一体論」第15巻の独立性

第1部冒頭で、三位一体論を論証する目的は「動物と異なる人間の魂が父・子・聖霊なる神と似ているということ、聖書を信じるだけでなく論拠に基づいて論証しなければならない」とある²³。続いて、第1巻から14巻で証明した真理を整理する。第2部では、探求の方法と限界について詳細な議論が為される。第3～4部は、アウグスティヌス独自の人間の精神における三一性の議論である。第3部では人間の言葉、第4部は人間の愛について、その三一性を論証する。第5部は、精神の類比の限界性について論ずる。各部は、新たな議論の開始を示す前文があるので識別は容易である。説明は必要に応じて既に議論した内容の引用先を明示しており、論理の一貫性に十分考慮している。これらの構成と形式から、第15巻は単独の論文形式を十分に整えていると言える。それに加えて、第15巻は第1～14巻に対する独立性が高いと言える。その理由は、三位一体論全体の構成は、第1～7巻で伝統的な三位一体論を中心とした考察、第8巻から独自の考察を開始、第9巻～14巻はあらゆる観点から論証を模索、そして第15巻に進む流れとなっているからである。第15巻全体が、長い年月をかけて達した最終議論であり結論である。

3.3 「三位一体を探求する方法」の論証

第2部「三位一体を探求する方法」では、第1部に示した「聖書を信じるだけでなく論拠に基づいて論証する」ための具体的方法を検討する。まず、そもそも何を論証するのかについて、神に相応しい言表を整理する。仮にその中から一つの「知恵」を選ぶとしても、結局は三位一体すべてが「知恵」となり、3つのペルソナに違いは見いだせない。この考察から、神の言表によって三位一体を論証することは困難という結果になる。

次に、人間の精神における三一性の検討をした結果、神の不可視性を、造られたものをおして知解して観ることは不可能であるという。その理由は、仮に私たちが理性によって私たちの内に観たとしても、私たちが観ないが信じなければならないものがまだ存在し続けるからである²⁴。そこで、別の視点として神の不可変的な善に注目して、人間の精神に三位一体の似姿を探求する方法を検討する。その結果、記憶、知解、愛または意思に三一性を見出すことができるが、神の本質には到底及ばないと、以下の様に語る。

それでは、人間のうち誰が、神がそれによって万物を知る知恵を理解し得ようか。私たちは記憶に在る場合には未来のことを知解によって予知しうるが、神は過去、現在、未来をすべて同時に現在的に視野の中に置くことができる。このようなことは私たちの精神力では不可能である。神は各個のものを別々に思い回しによって見るのではなく、一つの永遠にして不可変的な言詮を絶した眼差しによって知るものの一切を捉えるのである。

この限界は次の言葉によって克服される。「わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔とを合わせて見ることになる。」（一コリ13：12）アウグスティヌスはこのパウロの言葉から人間が神を知る限界を知り、「神を知解するのにふさわしい類似²⁵」である寓喩を探求する方法に確信を得るのである。

3.4 「三位一体から生まれる言葉」の論証

第3部「三位一体から生まれる言葉」は人間の言葉についての議論である。人間が知識のもとづき思惟によって言葉を発することが、父なる神と神の御言であるイエス・キリストの関係とよく似ていることを論ずる²⁶。

外的に響く言葉は内的に閃く言葉の徴である。内なる言葉が人間の感覚に明らかにされるように音声を受け取って身体の声となるのである。一方、「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。」（ヨハ1：14）とあるのは、神の御言が人間の感覚に明らかにされるように肉を受け取られたのである。それゆえ、甚だしい不類似ではあるが、この人間の言葉のある種の類似によって、神の御言が幽かではあるが見得るのである。

この考えは、ヨハネによる福音書の冒頭にある、「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。」（ヨハ1：1-3）と密接に関係している。ここにある「言葉は、初めに神と共にあった」、「万物は言によって成った」、「言は肉と

なって、わたしたちの間に宿られた」を根拠に、アウグスティヌスは三位一体の神と私たちの言葉の類比を考察したのである。

私たちの言葉の類似において、神の御言の類似がある。私たちの業は、言葉がそれに先行しなくては存在しえない様に、被造物は御言なくしては存在しえない。神の御言である御子だけが肉として創られた結果、私たちの言葉は御子の範型にしたがい、それにならう時正しく生きる。

以上のように、ヨハネによる福音書の証言を根拠として、「内なる言葉」あるいは「ある種の旋回的な運動によってあちこち向ける精神のあるもの²⁷」を神の御言の類似とする精神の三一性モデルが生まれた。しかし、このような旋回的に運動する精神が神にあるはずもなく、人間が知ろうと知るまいと神の知恵は永遠に変わらない存在であることが前提であり²⁸、そもそも神の三位一体における三つのペルソナは、一つのペルソナにある記憶・知解・意志というような三機能ではない²⁹。このような不類似を認めつつも、彼は三位一体の神と人間の精神の類比を論ずるのである。

4. 考察

4.1 聖書を論拠とする意味

第15巻における三位一体論の論証構造を概観するならば、聖書を論拠として、被造物としての人間の精神に三位一体の神の似姿を探求するという論法である。

ここで、聖書を論拠とすることの意味について、序論で述べた信仰と理性に関係するアウグスティヌスの聖書の読み方を確認しなければならない。彼は、聖書を文字通りに読んで曲解していたが比喩的に読むことで解決されることを学び³⁰、キリスト教を誤解していたと語っている³¹。そして、「聖書は、すべてのものにたやすく読まれながら、その神秘の威厳を深遠な意味の内に収め、そしてもっとも平明な言葉ともっとも謙虚な語り方で、万人に読まれようとしながら、心の軽薄でない人びとの細心の注意を要求する」という理解に達した³²。この聖書観は、序論で述べたアウグスティヌスの信仰と理性に関する二つの定式と同じであり、聖書を信仰と理性にもとづく両面から読む視点が生まれるのである。聖書を論拠とすることは、聖書を通して知る真理を根拠とすることである。

実際、三位一体論では信仰的な部分については次のように扱っている。(1) 巻または章に明確に分離している、(2) 一つの節でも信仰的な部分が混在した場合は章として分離している、(3) 第1巻から4巻で扱った伝統的キリスト教信仰による救い、復活、終末等の教理は三位一体の論証では直接関与しない、(4) 告白、祈りなどの用語を用いて信仰表現であることを明示している、などである。

以上のことから、聖書を根拠とする意味は次の通りである。(1) 聖書の信仰と理性的な部分の扱いを分離すること、(2) 神に関する言表を根拠とするのではなく³³、被造物との類比³⁴について聖書から得る真理をもとに論証すること、以上である。

4.2 人間の精神を寓喩とする意義

上記の考察にもあるように、論証と言っても、三位一体と人間の精神の類比を論証したのである。人間の精神が神の似姿と似ていて、鏡におぼろに映ったものを見るように三位一体の神を知るという論証である。寓喩が神に対する説明の限界であることについては、第2部「三位一体を探求する方法」で詳細に論じられている。見えない神を言葉で言い表して理解することは、見えない神を見る行為であり矛盾する。従って、神を直接言葉で表現するのではなく、何かに例えること、すなわち寓喩が限界であるという結論である³⁵。

しかし重要な点は、三位一体の神について人間の精神による寓喩が大きな価値を有するという点である。聖書には神についてたとえ話で語ることの理由が書かれているが³⁶、人間はたとえ話によって目に見えないものに対する理解を深めるのである。現代科学の知識と思考方法に慣れた私たちにとって、神の似姿を人間の精神との類比で理解することは極めて有益なのである。第3部では、神の知恵に関する三位一体と人間の言葉の類比を論じている。人間が言葉を発することとイエス・キリストの誕生が似ているという寓喩である。この寓喩は人間の精神の卓越性と真理を求める姿を極めて具体的に物語るのである。

以上、4.1, 4.2でなされた考察は、矢内原が三位一体論講義の最後で示したアウグスティヌスが明らかにしようとした内容と一致する³⁷。彼は、(1)三位一体は哲学的に弁護せられうること、(2)三位一体を知することは信者にとって最大の希望であること、以上の2つを挙げている。前者は、三位一体が科学的な考察として認められること、後者は、三位一体の理解は信じる者には大きな現実化の力となることを示している。

4.3 「三位一体から生まれる言葉」と社会福祉の接点

第3部「三位一体から生まれる言葉」の考察により、社会福祉の接点として以下の点が考えられる。

- (1) 人間の精神における三位一体の神の類比は、人間の尊厳に関する一つの具体的な表象を与える。言語化される以前の精神の眼差しの存在は、例え人間が正常に言葉を発しなくとも、知識・思惟・意志の三一性が存在することを示している。記憶を起源として思惟による内的な言葉が生まれるモデルは、人間の尊厳の一つの表象である。
- (2) 一方、パウロが「鏡におぼろに映ったものを見る」ように、言葉の類比は人間の精神が知識・思惟・意志によって真理をおぼろに見ることである。知識・思惟・意志の三一性を持つ優れた人間の精神は、真理を見ることにおいて、人間によって大きな違いがあることを意味する。このことは、人間の多様性について新たな視点を与える。
- (3) 対人援助では、聞くこと、知ること、共感することの重要性がしばしば言われる。しかし、アウグスティヌスは人間が五官から得た知識については極めて慎重であり、人間の精神における神の似姿の論証では除外している³⁸。

(3)については、第11巻で「身体の五官から導入された記憶においても三一性が見いだされるが、見られる物体から導入された三一性は神の似姿とは言えない」³⁹と語っている。

ただし、第3部は知恵・言葉を中心とした議論なので、ここでは除外した事実を指摘するに留め、この後なされる愛の議論を含め改めて検討する。

5. 結論

以上の結果および考察から得られる結論は以下の通りである。アウグスティヌス「三位一体論」第15巻第1～16章は、現在広く認められている聖書解釈方法⁴⁰と寓喩によって三位一体の神を人間の精神に於いて論証している。精神の三一性モデルにより、知識・思惟・意志から発せられる人間の言葉は、三位一体の神とイエス・キリストの類比を現実的な観点から論証している。このモデルは人間の精神に関するモデルであるが、広い意味で社会福祉の接点となる可能性は以下の点である。

- (1) 人間の精神と神の似姿との類似性は、人間の尊厳について具体的な表象を与えること
 - (2) 同時に、人間の多様性について新たな視点を与えること
 - (3) 人間の精神と神の似姿との類比においては人間の感覚は除外されること
- 以上である。これらは第15巻の残りの部分と合わせて改めて検討する。

凡例

- ・「三位一体論」テキストの引用は、巻・章・節をコロンの区切り（ ）内に表示した。例えば（10：1：1）は「三位一体論」第10巻第1章1節を意味する。連続する節を引用する時はハイフンで開始と終了を区切り、第15巻に限定される時は章・節のみ表示した。
- ・本文中で「三位一体論」テキストまたは付録本文を引用する時は二字下げて太字とした。
- ・聖書は日本聖書協会「新共同訳聖書」を使用した。引用は書名略語に続いて章と節をコロンの区切り（ ）内に表示した。例えば（ロマ1：1）は「ローマの信徒への手紙」第1章1節を意味する。複数の連続する節の引用はハイフンで開始と終了を区切った。
- ・引用文献はすべて参考文献として一覧表に示し、通し番号を〔 〕で示した。例えば〔1〕p.10-12は、参考文献〔1〕の10頁～12頁を示す。

引用文献・注

- 1 1960年10月1日発足した日本キリスト教社会福祉学会の規約第3条には、「本会はキリスト教の福音に基づいて社会福祉の研究と実践を推進し、広く社会福祉に寄与することを目的とする。」とあり、本稿の目的も同じである。
- 2 現在の聖書は、4世紀末にヒエロニムスが、それまで使われていた様々な聖書を調査研究して、旧新約聖書をラテン語に翻訳した「ウルガータ」聖書が元である。その後若干の改定が行われ現代に至っている。
- 3 〔3〕：アウグスティヌス（354-430年）は386年マニ教からキリスト教へ回心し、396年ヒッポ（アルジェリアの海岸にある現在のアンナバ）の教会司教に就任した。

- 4 [1]：三位一体論は399年から約22年の際月をかけ420年頃完成、ラテン語で書かれ15巻からなる。本研究では、1975年に出版された中沢宣夫氏による日本語訳を使用した。アウグスティヌスはヒエロニムス以前の古ラテン語訳聖書を用いている。現在の新共同訳聖書と「詩編」の編・章・節が多少異なり、三位一体論での引用とは日本語訳が若干異なる。本稿ではすべて新共同訳聖書の日本語訳に統一した。
- 5 伝統的なキリスト教は、父と子と聖霊の三位一体の神が存在し、子が受肉して私たちと神の仲保者となったという信仰である。一部のキリスト教派は三位一体論を否定しているが、伝統的なカトリック教会、プロテスタント教会、正教会は認めている。本研究では三位一体論を認めるキリスト教を前提とする。
- 6 最も大きな脅威はグノーシス主義であり、アウグスティヌス自身も若い頃はグノーシス主義のマニ教に傾倒している。彼はキリスト教に回心してからマニ教を反駁する論文を発表した。
- 7 ニカイア信条は、325年ニカイアで開催されたキリスト教最初の公会議で成立した。しかしその後も、アリウスなどの異端による激しい三位一体論攻撃が続き、アウグスティヌスはカトリック教会の司教としてキリスト教教理の確立に努めた。
- 8 付録ノート：3)
- 9 付録ノート：12)
- 10 [1] p. 3：アウグスティヌスは三位一体論を論述する意図について、第1巻冒頭で次のように書いている。「聖三位一体に関するこの私の論述を読もうとする人は先ず、私の筆が、信仰という原理を軽蔑し、したがって理性への未成熟にして道はずれの愛によって欺かれる人々の詭計に対して監視しているのを念頭に置くべきである。」
- 11 [3] p.278-279
- 12 [4], [5]
- 13 [4] p.91：19歳から28歳（373～383年）の9年間の生活を告白している。マニ教に惹かれ、自由学科（文法、修辞学、弁証法、数学、幾何学、音楽）を身に着け、弁論術は教えるほどで、他にも占星術に興味を持っていたが空虚な生活だったとある。
- 14 [4] p.219：新プラトン主義はプラトンのイデア論を継承したプロティノスによって3世紀に展開された。アウグスティヌスが回心の少し前に、新プラトン主義の書物に大きな影響を受けたとある。
- 15 [4] p.237：プラトン派の書物を読んで、「あなたの見られないものを、造られたものによって悟り得て明らかに認めた」とある一方で、認識はひらけたが傲慢も増長したとある。
- 16 [4] p.239-241：アウグスティヌスはプラトン派の書物にはパウロに見られるへりくだる心を見いだすことができなかつたと語っている。彼は、福音書の言葉「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました。」（マタ11：25）を聴き、パウロの言葉「使徒たちの中でもいちばん小さな者であり、使徒と呼ばれる値打ちのない者です。」（一コリ15：9）という謙虚さに心打たれ、「これらのことはわたしの腸（はらわた）にしみこんだ。わたしはあなたの御業を考えておそれおののいた。」とあるように回心へ向かった。
- 17 [4] p.281：回心の出来事として、「取って読め、取って読め」という子供の声で聖書を開いたところ、肉のわがいを捨てキリストを身にまとうよう勧めるパウロの言葉（ロマ13：13-14）が現れたと書いてある。
- 18 [3] p.259：パウロ6世は「古代哲学全体がアウグスティヌスの著作に流れ込み、アウグスティヌスの著作から、続く諸世紀の教理の伝統全体に行き渡る思潮が発するといえます」と語っている。
- 19 [3] p.278：教皇ベネディクト16世は「聖アウグスティヌスの知的・霊的な歩みの全体は、現代に

も適用する、信仰と理性の関係における模範となります。このテーマは信仰者のものだけでなく、真理を求めるすべての人のテーマです。」と語っている。

- 20 [6]：矢内原忠雄は第二次世界大戦中の1941年4月～1942年1月、自宅で聴講者を集め三位一体論の講義を行い、1971年に土曜学校講義として出版した。
- 21 [3] p.291-292：三位一体論の最初の12巻は399～412年の間に書かれアウグスティヌスが知らない内に公刊されてしまった。第15巻まで完成したのは8年後の420年頃で、彼が同僚に宛てた手紙の中に、「それはたいへん骨の折れる仕事ですが、わずかな人しか理解できないと思うからです。それゆえ、多くの人に役立つとわたしが希望する文書の方が急を要します。」と、遅れた理由が書かれている。彼は大論文を書くより奉仕を重んじた人柄であったと、ベネディクト16世は語っている。
- 22 [1] p.520：訳者注に「人はアウグスティヌスが『三位一体論』の末尾で為したことに神の三一性を解明し得ない。」と、カール・バルトが教会教義学に書いたとある。
- 23 付録ノート：1)
- 24 付録ノート：6)
- 25 付録ノート：9)
- 26 付録ノート：11)
- 27 付録ノート：15)
- 28 付録ノート：16)
- 29 付録ノート：7)
- 30 アウグスティヌスに大きな影響を与えた4世紀のミラノの司教アンブロシウスは説教で「文字は殺しますが、霊は生かします。」(二コリ3:6)をしばしば引用した。「告白」には、それを聞いて自分の聖書の読み方が誤っていたことに気づいたと書かれている。
- 31 [4] p.160
- 32 [4] p.175
- 33 付録ノート：6)
- 34 付録ノート：9)
- 35 [8] p.105-106：注(163)に、アウグスティヌスが著書「説教」に記した次の言葉が紹介されている。「わたしたちは神について語っています。もしあなたが把握していないとすれば、何と驚くべきことでしょうか。もしあなたが把握しているなら、それは神ではありません。」「もしあなたがあたかも把握できたかのように思うならば、あなたの思考があなたをだましている。」
- 36 「だから、彼らにはたとえを用いて話すのだ。見ても見ず、聞いても聞かず、理解できないからである。」(マタ13:13)
- 37 [6] p.419-420
- 38 付録ノート：12)
- 39 付録ノート：3)
- 40 [7] p.208：第2バチカン公会議(1962-1965)で承認された「神の啓示に関する教義憲章」第12条に反映されている。そこには「神は、聖書においては、人間を使って人間の様式に従って語ったのであるから、聖書解釈者は、神が何をわれわれに知らせようと望んだかをよく知るために、聖書作者が実際に何を意味しようとしたか、またかれらのことばを通して何を示すのが神意であったかを入念に研究する必要がある。」と、アウグスティヌスを引用している。[8] p.24-26：教皇庁教理省の国際神学委員会(2004-2011)でも第12条を引用し、聖書テキストの意味を理解し説明するために、適切な文献学的、歴史学的、文学的方法を利用しなければならないとしている。

参考文献

- [1] アウグスティヌス, 中沢宣夫訳. 三位一体論. 初版, 東京, 東京大学出版会, 1989, 540p.
- [2] アウグスティヌス, 加藤武訳. キリスト教の教え. オンデマンド版, 東京, 教文館, 2011, 427p. (アウグスティヌス著作集6)
- [3] 教皇ベネディクト十六世. 教父. 初版, 東京, カトリック中央協議会, 2009, 398p. (ペテロ文庫)
- [4] 聖アウグスティヌス, 服部英次郎訳. 告白 (上), 改訳初版, 東京, 岩波書店, 2012, 329p. (青805-1岩波文庫)
- [5] 聖アウグスティヌス, 服部英次郎訳. 告白 (下), 改訳初版, 東京, 岩波書店, 2013, 291p. (青805-2岩波文庫)
- [6] 矢内原忠雄著, 矢内原伊作; 藤田若雄編. アウグスティヌス三位一体論. 初版, 東京, みすず書房, 1998, 423p. (土曜学校講義3)
- [7] 南山大学監修. 第2バチカン公会議公文書全集. 初版, 東京, サンパウロ, 2011, 437p.
- [8] 教皇庁教理省 国際神学委員会. 今日のカトリック神学: 展望・原理・基準. 第1版, 東京, カトリック中央協議会, 2013, 111p.

付録

「三位一体論」第15巻ノート1

目次

第1部 第1巻から14巻で証明した真理（第1～3章）

- 1) 動物より優れた魂の特性を持つ人間が神の似姿であることを論証する。(1:1)
- 2) 論究を積み重ねて人間の精神に神を求めることに到達した。(2:2-3)
- 3) 第1巻から14巻で証明されたこと。(3:4-5)

第2部 三位一体を探求する方法（第4～9章）

- 4) 創造主に対する信仰告白。(4:6)
- 5) 神に対する言表がすべてのペルソナに当てはまるか調べる。(5:7-8)
- 6) 神に対する言表の考察を経て人間の精神の内に三一性を見出す。(6:9-10)
- 7) 人間の精神に神の似姿を見出すが人間は神の知識に到達できない。(7:11-13)
- 8) パウロの言葉「鏡におぼろに映ったものを見る」を解釈する。(8:14)
- 9) 「鏡におぼろに映ったものを見る」とは寓喩である。(9:15-16)

第3部 三位一体から生まれる言葉（第10～16章）

- 10) 心の中で思うことは神の御言と類似している。(10:17-19)
- 11) 私たちが言葉を発することと御子の受肉が似ている。(11:20-21)
- 12) 私たちの真実な言葉は記憶の宝庫から生まれる。(12:21-22)
- 13) 神は創造する以前から創造するものを知っている。(13:22)
- 14) 父から生まれた御言葉と私たちの内的に語る言葉は似ている。(14:23-24)
- 15) 内的な言葉はある種の精神に存在する旋回的な運動から生まれる。(15:24-25)
- 16) 神は人間のように思惟から言葉を生むのではない。(16:25-26)

第4部 三位一体の愛（第17～21章）

- 17) 聖霊が愛なる神である。(17:27-31)
- 18) 完全な信仰を持っていても愛が無ければ無に等しい。(18:32)
- 19) 聖霊が神の賜物であることを聖書は水に例える。(19:33)
- 20) 主は人々に賜物を与え、人々の内で贈り物を受け取る。(19:34)
- 21) 聖霊は異邦人に注がれる。(19:35)
- 22) 聖霊の賜物は聖霊であり、聖霊を与えられたものと神との一致がある。(19:36)
- 23) 聖霊は神であり、固有の意味で愛と言われる。(19:37)
- 24) 精神の記憶、知解力、意思に見出す三位一体の似姿。(20:38-39)
- 25) 意志または愛は記憶と知解に由来する。(21:40-41)

第5部 三位一体を見る限界（第22～28章）

- 26) 一つの人格にある三機能は、三つのペルソナの一体とは違う。(22:42)
- 27) 私たちの三つの能力が神の似姿であり神を見ることが出来る。(23:43-44)
- 28) 精神の三一性を信じること。(24:44)

- 29) 鈍くても、キリスト・イエスの救いが得られる。(25：44-45)
- 30) 父と子とから聖霊が発出する。(26：45)
- 31) イエス・キリストは神性において聖霊を与え人間として聖霊を受けられる。(26：46)
- 32) 時間なくして子は父から生まれ、同時に父と子から聖霊が発出した。(26：47)
- 33) 三位一体において生誕と発出を区別するのは難しい。(27：48)
- 34) 精神によって神を見るように努めなければならない。(27：49)
- 35) わが魂の眼ざしは罪のゆえに真理を見ることはできない。(27：50)
- 36) この書に書かれたものが主に由来することを祈る。(28：51)

注：ノート1は第1～3部のみ収録、要約部分は2字下げた太字とした。

第1部 第1巻から14巻で証明した真理（第1～3章）

- 1) 動物より優れた魂の特性を持つ人間が神の似姿であることを論証する。(1：1)

動物には無い理性的・知解的な人間が自然界を創造した存在と似ていること、この創造者が三位一体であることを、信仰だけでなく論証する必要があると語る。

人間は動物にもある魂の他に、理性的・知解的な優れた魂の特性を持っている。それだから神の似姿なのである。私たちが本性を超えて、ある存在、真実な存在を問い求めるなら、創られずして創る本性としての神がいるのである。この本性が三位一体であることを聖書の権威によって信ずる者だけでなく、知解する者にも論拠に基づいて論証しなければならない。

人間が神の似姿というのは、「神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。」(創1：27)という旧約聖書の天地創造の物語に由来する。新約聖書ヨハネによる福音書では「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。」(ヨハ1：1-4)とあり、天地創造が言葉によってなされたことと記されている。

- 2) 論究を積み重ねて人間の精神に神を求めることに到達した。(2：2-3)

人間が神を問い求めることは喜びである。論究をこつこつ積み重ね、ようやく人間の精神に神の似姿を見出したと語る。

主は問い求めても決して見いだされないように見えるが、信仰は問い求め、知解は見出し、問い求める人は喜べと聖書にある。人間は神を尋ね求めるために神を知解するものでなければならない。そこで、神が創られたものをおして神を知ろうと論究を積み重ね、被造物固有のある種の三一性をおして、いわば段階的に上昇し、遂に人間の精神にまで到達した。

喜んで神を求めよとは、詩編の次の言葉を引用している。「主を求める人よ、心に喜びを抱き／主を、主の御力を尋ね求め／常に御顔を求めよ。」(詩105：3-4) 詩編には、この他にも、「心よ、主はお前に言われる／「わたしの顔を尋ね求めよ」と。主よ、わたしは御顔を尋ね求めます。」(詩27：8)とあり、神を心で尋ね求めることの勧めが多く語られている。

3) 第1巻から14巻で証明されたこと。(3：4-5)

第1巻から14巻の議論の中で、アウグスティヌスが証明された真理としていることを簡潔にまとめている。全体は第1巻から7巻までと第8巻以降の二つに大きく分けられる。

先行するものが忘却されないように、また、忘却したら速やかに読み直すことによって集め直されるよう、証明の根拠ではなく、これまでに証明された真理の全体について、簡潔にして一挙に見たい。各巻で、証明された真理は以下の通りである。

第1巻では、聖書によって三位一体の統一性と等しさが示される。

第2～4巻では、同じテーマを扱い、特に子と聖霊の派遣の問題を慎重に扱った。ここでは、遣わされたものが遣わしたものより小さいという主張は当たらないことが証明される。三位一体は、本性において等しく、不可変的・不可視的であり、偏在し分離されず働く。第5巻では、父は生まれない存在で、子は生まれる存在というならば、父と子は異なる本性であるというアリウスの詭弁を反論した。父と子は関係を言うのであり、本性においては等しく、このことが父・子・聖霊すべての関係に言えることを示した。第6巻では、いかなる意味でキリストは使徒の口をとおして神の力、神の知恵であると言われたのか論じられた。キリストを生んだ父自身は力と知恵の産出者であってキリストとは異なるという議論は保留したが、ここでも三位一体の等しさ、そして三つの神ではなく、三位一体なる神が示されたのである。また父と子は聖霊とは別物ではなく、三つはこれらの一つよりも大きなものではない。ヒラリウスの、永遠性は父、形相(美)は像(子)、働きは賜物(聖霊)とする三位一体論についても論じられた。第7巻では、先に保留した問題が、子だけでなく、父自身が力であり知恵であると説明される。父・子・聖霊、それぞれが神の力、神の知恵である。しかも、三つの力、三つの知恵が存在するのではなく、一つの神、一つの本質が存在するように、一つの力、一つの知恵が存在するのである。この神について、三つのペルソナ、あるいはギリシャ教父が三つの実体というのは、父と子と聖霊が何かと問われた時に語り出す必要上語られるのである。聖書から確実に知られるのは、父と子が存在し、しかも子は父と同じではなく、聖霊は父と子と同じではないということである。

以上が、第1巻から7巻までの要約である。この三位一体論前半部分は、アウグスティヌスにしても三位一体の理解がいかに困難であったかを物語っている。例えば、第2巻において、天使の業、不思議な業、さまざまな奇跡から三位一体の神の解釈を試みている。「神は、かつて預言者たちによって、多くのかたちで、また多くのしかたで先祖に語られたが、この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました。」(ヘブル1：1-2)という言

葉を引用し、このことを実証するかのごとく、旧約聖書の多くの記事から三位一体の神を見出そうとしている。しかし、結局はこれらに関する聖書の記述からは三位一体の神を探求するには限界があるという結論に達する。

そこで、第4巻では再び信仰に立ち帰り、第5巻では生むものと生まれたものは異なる実体というアリウスの主張に反論し、第6巻と7巻では、神の知恵と力について使徒の証言を検討している。第7巻8節では、三位一体の用語の語源についても検討している。ギリシャ語で三位一体は3つの実体1つの本質と表現するがラテン語では実体と本質は同一の単語なのでやむなくラテン語の「ペルソナ」を使い、3つのペルソナ1つの実体または本質と表現した経過がある。従って、三位一体とは唯一の神の統一性において父・子・聖霊が存在するという単なる表現に過ぎないことを確認している。

ヒラリウスという人物について若干補足すると、第6巻11節の訳者注には、「アウグスティヌス以前の三位一体論で名前を挙げているのはヒラリウス一人であり、第8巻以降の人間学的・心理学的な類比論の示唆を得たと思われる」とある。アウグスティヌスは、彼以前のキリスト教神学以外に、ギリシャ哲学、自然科学、数学、文学など、極めて幅広い知識を背景に三位一体論を探求しているが、「愛するもの、愛されるもの、愛」に閃いた新しいアプローチに達するまでには随分長い年月を要している¹。第8巻から、三位一体の神を求める対象を人間の精神に向ける。

第8巻では、真理の実体は、父・子・聖霊で等しく、いずれか二つをいっしょにしても、さらに三つ全体にしても各々と等しいことが証明された。次に、知解され観られる真理、すべての善の根拠である至高善、義なる精神によって愛される義によって、神が非物理的な本性であるだけでなく、不可変的な本性でもあることが、可能な限り知解されることを示した。また、聖書の中で神と語り表されている愛によっても神が知解されることを示した。すなわち、愛するもの、愛されるもの、愛というように、この愛によって知解する人々に微かな三位一体があらわれ始めた。第9巻では、人間は精神の視点から見ると神の似姿であるという点に論議が到達する。まず、精神が自己を知って自己を愛する時に、精神と知と愛に三一性が見出される。第10巻では、記憶と知解力と意思の三一性がより正確に見いだされた。この精神的な内なる人の三一性は、身体的な外なる人の感覚から得たものに親密に影響するので、その点について検討する必要が認められた。第11巻では、身体の五官から視覚を選び、見られる物理的なものにおいても三一性が見い出されることを示した。外なる人の三一性は、見られる物体、見る人の眼差しに刻印されるかたち、この両者を結合する力にあらわれた。さらに、内なる人においては、記憶の中にある物体の似姿、そこから思惟によって刻印されたもの、そしてこの両者を結合する意思の注視力に現れた。しかし、物体から導入された三一性はいずれも神の似姿とよぶことはできない。第12巻では、知識と知恵を区別して論じた。とりわけ知識と呼ばれるものは、知恵よりも低い位置を占めるゆえに、この三一性は当然内なる人に属しているが未だ神の似姿とはいわれない。第13巻では、キリスト教

信仰の称揚²において三一性を論じた。第14巻では人間の真の知恵について、言い換えると神の賜物について論じた。この知恵は知識から区別される。かくて、論議は精神の視点から考察された人間に神の似姿において三一性が現れるという点に達した。

アウグスティヌスが見出したことは、人間の記憶と知解力と意思における精神の三一性に見る神の似姿である。この議論は、第8巻において「愛するもの、愛されるもの、愛」の閃きから始まり、第10巻で具体化される。第11巻では視覚、第12巻では知識、第13巻ではキリスト教信仰、第14巻では知恵を対象として、人間の精神における三一性について幅広い観点から慎重に検討している。

第2部 三位一体を探求する方法(第4～9章)

4) 創造主に対する信仰告白。(4:6)

第1部でこれまでの議論をまとめ、続いて聖書をもとに、創造主に与えられる前提を信仰の告白として集約している。

だから、今後、私たちは神なる三位一体を永遠にして非物体的・不可変的なものそのものにおいて問い求めよう。これらの全き観想³において、永遠である淨福⁴な生が私たちに約束されている。なぜなら、聖書は神がいると言明するだけでなく、私たちを含め周囲にあるすべてのものの本性が、私たちより遥かに卓越している創造主を持っていると宣言しているからである。この創造主が、私たちに本性的な精神と理性を与えたのである。創造主は生命の充実を持ち、すべてのことを知り、知解し、また死ぬことなく腐敗することなく、変わることなく、さらに物体では無く、すべての霊⁵のうち最も強く、最も正しく、最も美しく、最も善く、最も淨福である霊であると告白しなければならない。

これらの神についての言表はカトリックの伝統である。被造物を通して神を知るという観点からは、神が永遠にして非物体的、不可変的ですべてを創造した主体という認識が最も基本である。創造主が人間に精神と理性を与えたという点は、人間の創造に関する聖書の信仰と、動物と人間を比較して私たちが得る知識、この両者から容易に理解できる。アウグスティヌスの三位一体論は最終的に、この前提をもとに人間の精神に神の似姿を見出す。

5) 神に対する言表がすべてのペルソナに当てはまるか調べる。(5:7-8)

神に関するこれらの言表が、三位一体の全体に言われるのか、三つのペルソナそれぞれに言われるのか、あるいは三つのペルソナの一部だけに言われるのかという検討を行う。

この神について語られるすべてのことは、唯一なる神である三位一体全体と各々のペルソナにも当てはまるのである。子は知恵と呼ばれても、父は知恵と呼ばれないなどと、どれか一つのペルソナが一部を欠くというのは理に合わないからである。もしそうならば、三位一体はどこに、また、どのように現れるのであろうか。

それで、まず、この多くの完全性を或る単一なるものに還元しよう。神が命というこ

とは本性そのものであり、その命は知覚し知解する。しかし、神に身体はないので、神の本性そのものが知覚し知解する。同じように、神は永遠であるとか、不死であるとか、さらに不朽であるとか、不可變的であるとか言い表されようが、三位一体のすべてに同じことが言われるのである。

それで、神に相応しい言表を、「永遠、不死、不朽、不変」、「生命、賢明、強力、美」、「義、善、浄福、霊」という、3グループに分けて見よう。各グループで、最後の言葉が実体で、その他はすべて質に見えるが、神においてはそうではない。質のように言い表されるように見えるものはみな実体あるいは本質に従って理解すべきである。神は実体に従って霊であると言われ、質によって善であると言われるのではなく、ともに実体にしたがって言われるのである。

そこで神に相応しい言い表しとして、志向が分散しないように、各グループから「永遠、賢明、浄福」を選ぼう。賢明を選んだ理由は、知恵を持たない生命があること、強力は人間の場合相互に比較され、美は物体にも用いられるから除外している。浄福を選んだ理由は、人間において霊は浄福でないこともあり、義人も善人も浄福でないことがあるからである。

神に相応しいさまざまな言表を集めて、分類して選択することができることを示す。ここでは永遠、賢明、浄福の3つを選択する。

6) 神に対する言表の考察を経て人間の精神の内に三一性を見出す。(6:9-10)

その結果、最もふさわしい一つを選ぶことが可能であり、その一つについてどのように三位一体であるかを知解する方法が可能であると語る。そこで神の知恵を選んで検討したが3つのペルソナに違いは見いだせず、愛に思いが及んだ時、初めて三一性が閃き、人間の精神を考察すべきことに気づく。議論の中で最も大きな転換がここで起きる。

神に関する12の言い表しを3つにしたように、さらに3つを1つにできるであろう。そして、その一つについて、他は黙してもどのように三位一体であるかを知解するという論議の仕方を考えることが可能である。例えば、知恵がどのようにして三位一体であるかを示すようにである。第7巻で論じたのは、知恵について3つのペルソナに違いは見いだせず、神なる知恵を私たちが信じる以外に知解する方法がありうるのか疑問が深まった。第8巻では、さらに神の本性を言論によって知解することを高めようとしたが、それは身近に存在する光のようであるが、精神の眼差しがこの光を確実に見ることができず、まだ三位一体は現れなかった。そこには或る質量的な集塊は存在しないことを何とか認めたと過ぎない。

しかし、私たちが聖書において「神は愛です」(一ヨハ4:16)と言われるその愛に到達した時、三位一体が「愛するもの、愛されるもの、愛」という三一性と共に微光を放ったのである。そこで、私たちは論議の途中で神の似像として創られた人間の精神そのものの考察に戻ったのである。第9巻から14巻は、私たち自身もそうである被

造物のところに「神の不可視性を、造られたものをおして知解して見る」ために知解力を修練したが、神なる三位一体を観ることは不可能である。私たちの内に三一性を見るように神なる三位一体を見るのであろうか。精神の力に属している三一性は信じるというよりはむしろ見るものであるが、他方、神が三位一体であるということは見ると言うよりは信じるものであろうか。もし、そうであるなら、私たちは造られたものを通して神の不可視性を知解して見ることはない。私たちが理性によって私たちの内に観るものと、私たちが観ないが信じなければならないものが存在し続けることになるからである。

第8巻では、私たち自身ではない不可変的な善を私たちが観ること、第14巻では、人間が神から受領する知恵について私たちが語る時、そのことを想起させた。かくて、知恵とその知識とその愛の三位一体があり、私たち人間のうちにも三一性、すなわち精神と自己を知らしめる知と自己を愛させる愛を見出すのである。

神に関する言表から三位一体を理解することは難しく、第8巻から人間の精神そのものの考察に戻った。しかし、第9巻から14巻の議論では、神の不可視性を、仮に私たちが理性によって私たちの内に観たとしても、私たちが観ないが信じなければならないものがまだ存在し続けるという矛盾に至った。これらの検討の後に、人間が神から受領する知恵について私たちが語る時に神の不可変的な善を観ることを想起させた。知恵とその知識とその愛の三位一体があり、私たち人間のうちにも三一性、すなわち精神と自己を知らしめる知と自己を愛させる愛を見出したのである。

7) 人間の精神に神の似姿を見出すが人間は神の知識に到達できない。(7: 11-13)

人間の精神にある三一性と神の三位一体との違いを検討し、神を知ることは不可能であると告白する。

精神と自己知と自己愛の3つは、人間の中に、それ自体が人間ではない様に存在している。この3つは人間では無く、人間の有であり、あるいは人間の中に存在する。もし身体を除いて魂だけを考えるなら、精神は魂のあるもの、いわば魂の頭、眼、顔であり、魂において卓越した部分である。私たちが三位一体は神の或るものであって、それ自身は神でない様にして神の中にあると言うことはできない。しかし、人間は、ただ精神によってのみ神の似像であると言われ、一つのペルソナであり、精神において三位一体の似像なのである。神の場合、三つのペルソナは一つの本質であるが、それは各々の人間が一つのペルソナであるようにではない。

次の点にまた、大きな相違がある。人間の場合、記憶がなければ想起しないし、知解力が無ければ知解しない。また、意思によらなければ愛さない。記憶、知解力、意思がそれぞれ機能しないと人間としては機能しない。ところが神の場合、人間と同様に考えると道理に合わないことを第7巻で極めて確実な仕方論議し点検し、拒絶したのである。神の3つのペルソナは人間の記憶、知解、意思というような分離した機能ではな

い。愛の無いところに知恵がある訳もなく、何も想起することなく知解することもない。御父は御自身の知解、御自身の記憶であるように、御自身の愛であると結論づけられる。

そうすると、記憶、知解、愛または意思という3つは神なる不可変的な本質においては、ただ御父だけであって御子、聖霊では無い。というのは、御子は知恵から生まれた知恵であり、それは御子を生みたまうた父に由来するからである。同様に、聖霊が自ら想起し、知解し、愛するのは御父の発出に由来するからである。

それでは、人間のうち誰が、神がそれによって万物を知る知恵を理解し得ようか。私たちは記憶に在る場合には未来のことを知解によって予知しうるが、神は過去、現在、未来をすべて同時に現在的に視野の中に置くことができる。このようなことは私たちの精神力では不可能である。神は各個のものを別々に思い回しによって見るのではなく、一つの永遠にして不可変的な言詮を絶した眼差しによって知る一切の一切を捉えるのである。従って、このような困難と行き詰まりに際会して、「その驚くべき知識はわたしを超え／あまりにも高くて到達できない。」(詩139:6)と叫ばざるを得ない。それにも拘わらず、「主を、主の御力を尋ね求め／常に御顔を求めよ。」(詩105:4)として火が燃えたつのです。

ここでは、父・子・聖霊なる三位一体の神と、人間の記憶、知解、愛または意思の三一性をかなり厳密に比較検討している。記憶、知解、愛または意思が、人間の精神では三位一体的に機能するが、これらを父・子・聖霊が分担するのではなく、この3つは父だけが持つ本質であり、子が父から生まれ、聖霊が父から発出されることによって、父も子も聖霊もこの3つを同じ本質として持つと説明する。この比較検討により神の三位一体を知ることがますます困難であることを告白している。

8) パウロの言葉「鏡におぼろに映ったものを見る」を解釈する。(8:14)

パウロの言葉の解釈により、神を知解することの限界性について考察する。

私は知恵が非物体的な実体であり、肉の眼では見られないものを見られるようにならず光であることを知っている。けれどもパウロほどの偉大な霊的な人が「わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔とを合わせて見ることになる。」(一コリ13:12)と言っている。もし、私たちがこの鏡とはいかなる性質のものか、また何であるか、ということを開き求めるなら、たしかに鏡において見ているものは似姿に他ならないことに気づく。

同じ使徒は、このことを次のような言葉で意味表示している。「わたしたちは皆、顔の覆いを除かれて、鏡のように主の栄光を映し出しながら、栄光から栄光へと、主と同じ姿に造りかえられていきます。これは主の霊の働きによることです。」(二コリ3:18)だから、私たちは私たち自身でもあるこの似姿によって、あたかも鏡をとおしてのように、私たちが創られたお方を何とかして見ようと努めているのである。主の霊の働きによって使徒が付加したことは、私たちにかくも希求すべき変化の善が与え

られるのは神の恩恵に依ることを示すのである。

新共同訳聖書の「鏡におぼろに映ったもの」という表現を用いたが、テキストでは「謎において」となっている。人間は神を知解できないが神の似姿をおぼろに見ようとする存在であると言う。

9) 「鏡におぼろに映ったものを見る」とは寓喩である。(9:15-16)

神を見ることは隠された別の意味によって神を見ることであると説明する。

「鏡におぼろに映ったものを見る」とは寓喩⁶とも語られる。私たちは事実にもとづく寓喩、あるいは、隠された別の意味によって神を見るのである。例えば、ガラテア書には、アブラハムと奴隷のハガルとの間の子は古い契約、自由な女サラとの間の子は新しい契約という寓喩が書かれている。使徒は鏡におぼろに映ったものという名称で、神を知解するのにふさわしい類似を意味表示しようとしたと考えられる。そもそも、人間の思念すら精神のある視観であって、精神そのものではなく、それらのものの類似が思念によって見られるのである。このことは私たちの生でも不思議なことではない。思念とは精神のある視観であり、感覚によって知覚されたもの、徳とか悪徳、学問などの知識、これらのものより高い原因、悪しきもの、空虚なもの、虚偽なるものをも思念するのである。

寓喩とは、ある事物を直接的に表現するのではなく、他の事物によって暗示的に表現する方法である。確かにガラテア書(4:24-26)には、アブラハムの妻サライと女奴隷ハガルから生まれた二人の息子に関する寓喩が記されている。パウロの「鏡におぼろに映ったものを見る」という言葉も、隠された別の意味で神を見ることの寓喩であり、聖書は寓喩で神を語ることを説明する。さらに、直接見ることができないという点では、神も私たちの精神も同じようなもので、「そもそも、人間の思念すら精神のある視観であって、精神そのものではなく、それらのものの類似が思念によって見られるのである。」と論じる。

第3部 三位一体から生まれる言葉(第10~16章)

10) 心の中で思うことは神の御言と類似している。(10:17-19)

第13巻での詳細な議論の結果、人間が思惟し言葉を発するところに三位一体の類似が見られると語る。

私たちに知られたものとして思惟し、またたとい思惟していないときでも知の内に持っている事物について語ろう。それらのものは固有な意味で知恵とよばれるべき観想知に属し、あるいは固有な意味で知識とよばれるべき実践知に属することはすでに私が論じたとおりである。この両者は共に一つの精神の有であり、また神の一つの似姿である。しかし、第13巻で明らかにしたように、これらの中でより低い位置を占めるものについても三位一体の類似が見いだされるのであるが、それは神の似姿とよばれるべきではない。私たちは知恵によって思惟する。心の中で思惟することもあり、思惟し

て語ることもある。この思惟は、その人の中に存在するから、真実なものである。「彼らは思惟しつつ語った」「語りつつ思念した」という表現が聖書にある⁷。

だから、或る思いは心の語りであり、主が「口に入るものは人を汚さず、口から出て来るものが人を汚すのである。」(マタ15:11)というとき、示されたのである。私たちには身体の口と心の口がある。人を汚すものは心の口から出るという。彼らが心の中で語ったことを、主は見られたと言うように、精神の力においては見ることと、聞くことは同じである。

したがって、言葉が外に響く以前だけではなく、その響きの似姿が思い廻らされる前にも、御言葉のある類似を見るのである。このことは、鏡におぼろに映ったものとして、「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。」(ヨハ1:1)とされている御言のある類似である。私たちが真実を語り出す時、言い換えると、私たちが知っていることを語り出すとき、必然的に、私たちが記憶に保持している知識そのものから私たちの言葉が生まれるのである。この言葉はその生誕の根拠である知識と全き意味で似ている。私たちが知っているものから形成された思惟は私たちが心において語る言葉である。そしてそれはギリシャ語でもラテン語でもなく、またその他の国語でもない。しかし、その言葉は私たちが語りかける人々の知へ伝える必要があるとき、それを意味表示すべき或る徴を受取る。そして大抵の場合、音声か、時には合図か、前者は耳に、後者は眼に提示されて、その結果私たちが精神によって描く言葉は物的な徴しをとおして身体感覚にも知られるようになる。私たちの音声は思惟するものの徴であり、文字は音声の徴である。

ヨハネ福音書「言葉は肉となって私たちの間に宿られた。」(ヨハ1:14)に象徴されるアウグスティヌスの三位一体論の説明である。ここでは、言葉を発する前に人間の精神の中に生まれるものと三位一体の類似性を語る。

11) 私たちが言葉を発することと御子の受肉が似ている。(11:20-21)

人間が言葉を発することと三位一体なる神の御子の受肉とが類似していること、私たちはおぼろに映る御子にならう時、正しく生きることを説明する

外的に響く言葉は内的に閃く言葉の徴である。内なる言葉が人間の感覚に明らかにされるように音声を受け取って身体の声となるのである。一方、「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。」(ヨハ1:14)とあるのは、神の御言が人間の感覚に明らかにされるように肉を受け取られたのである。それゆえ、甚だしい不類似ではあるが、この人間の言葉のある種の類似によって、神の御言が幽かではあるが見得るのである。

神の御言とは、あれこれの預言者に語られたような、人間の心や口をとおして伝搬される神の言葉では無い。この類似から問い求めようとしているのは、「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。」(ヨ

ハ1:1-3)、「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。」(ヨハ1:14)といわれる御言である。

したがって、私たちは人間の言葉に、神によって造られた神の似姿という言葉を開いて求めるのである。これらは音声において発せられず、音声の似姿において思惟されず、それらを意味表示するすべての徴しに先行し、心に留まっている知識から、この知識があるがままに内的に語られる時に生まれる。なぜなら、この神の似姿という言葉は、思惟の視観、知識の視観に全く類似しているからである。

知識の中にあるものが言葉の中にあるとき、それは私たち人間が期待する真実の言葉であり、真理である。知識の中にあるものは言葉の中にもあり、知識の中にもないものは言葉の中にもないのである。ここで、『然り、然り』『否、否』(マタ5:37)が認識される。善き業の知識から生まれる時、真実の言葉がある。もし私たちの生を指導する知識において、「然り」があるなら、それは業を指導する言葉においてもあり、もし一方に「否」があるなら、他方も「否」である。そうでなければ、そのような言葉は虚偽であり、正しい業では無く罪があるであろう。

私たちの言葉の類似において、神の御言の類似がある。私たちの業は、言葉がそれに先行しなくては存在しえない様に、被造物は御言なくしては存在しえない。神の御言である御子だけが肉として創られた結果、私たちの言葉は御子の範型にしたがい、それにならう時正しく生きる。

私たちが将来いつの日かなされるこの似姿の完成に到達するために、善き師は私たちをキリスト教の信仰と敬虔の教えによって教導される。それは「わたしたちは皆、顔の覆いを除かれて、鏡のように主の栄光を映し出しながら、栄光から栄光へと、主と同じ姿に造りかえられていきます。」(二コリ3:18)とあるように私たちを変えるためである。

私たちの似姿が完全に至るまで新しくされた時、私たちは神に似るものになるのだろうか。パウロは次のように言っている。「わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔とを合わせて見ることになる。わたしは、今は一部しか知らなくとも、そのときには、はっきり知られているようにはっきり知ることになる。」(一コリ13:12) 私は自分に可能な範囲で、人がそのことに注目するようにいくらかは触れたいのである。

人間が言葉を外に発することと御子の受肉が類似しているという⁸⁾。人間が言葉を発する以前に知識が生み出す言葉の源を内なる言葉と表現している。内なる言葉とは、ある特定の国語で認識できる以前の状態で、思惟の視観、知識の視観のようなものである。この内なる言葉が、神の御言である御子の似姿に変えられていくことが正しく生きることであり、この点について、次から具体的な検討が始まる。

12) 私たちの真実な言葉は記憶の宝庫から生まれる。(12:21-22)

人間が神の似姿にどこまで近づくかという議論が始まる。まず、私たちの言葉が生まれる知識について検討する。

先ず、私たちが語り出す時に思惟を形成する知識について考えてみよう。アカデメイア派の哲学は全てを疑い、人間には確実な知識が存在しないというから、身体感覚を通して精神へ入ってくるものを除外しよう。そうすると、「私たちが生きているということを知っている。」というのは確実な知識といえよう。確かに、外側から提供される知識は、見えるものと実際は別様である多くのものがあるように欺かれるのであるが、「自分が生きている。」という知識は、外部からではない内的な知識であり、アカデメイア派がいかにも逆らおうとも確実な知識と言える。このような知識は多くは無いが、「私は幸福でありたい。」「私は誤ることを欲しない。」など、確実な意思においても注目され得る。

一方、天と地の存在、有名な土地や都市の存在、歴史上の人物の存在などの知識は、身体感覚や他人の証言によって知られたことである。仮に、これがすべて真実であることを懐疑すれば、自分がどこで誰から生まれたかも知らないことになって道理に合わない。よって、これらの知識は、私たちの知識に非常に多くのものを付加したことを承認しなければならない。

以上のことから、人間の精神は自分自身によって、また身体感覚によって、さらに他人の証言によって受け取り知るこれらの知はみな、記憶の宝庫の中に埋蔵して保持するといえる。そしてこれらの知から、私たちが知っているものを語り出す時、真実の言葉が生まれるのである。しかも、この言葉はすべての声の前に、声のすべての思念の前に存在する。なぜなら、その言葉は知られたものに非常に類似しており、それからその言葉の似姿が生まれるからである。知の視観から思惟の視観が生まれるのである。それは、いかなる国語の言葉でもなく、真実なものの真実な言葉であり、自己自身からは何もも持たず、それが生まれるあの知からすべてのものを持つのである。真実な言葉は知られたものから生まれるのである。

人間は記憶にあることにもとづいて考える。記憶には人間の感覚や意志から得たものや本を読んだ知識などさまざまである。ここでは理性的に考えることに焦点を当てるので感覚にもとづく記憶を除外する。人間はいろいろな記憶を思い起こして言葉に組み立てて表現する。いろいろな記憶を思い起こすことを知の視観といい、言葉に組み立てることを思惟の視観という。知の視観、思惟の視観は国語の言葉を持たない内的状態であり、それらをとおして国語を持つ言葉が外的に発せられる。真実な言葉が発せられるのはその人の持つ記憶から生まれた言葉をいう。

13) 神は創造する以前から創造するものを知っている。(13:22)

私たちの真実な言葉は知識と思惟から生まれるという考え方を、三位一体の父なる神について類比的に考察する。

御言を生む神の知恵について、鏡におぼろに映ったものを見るごとく思惟することができる。神をすべての動物、すべての精神の上に置く人は、父なる神がご自分の身体感覚によってとか、ある人からどこかで学知されたなどと主張しない。神はいかなる身体も持たないからである。神が知るすべてを知るために、その完全性はご自身に充足している。

天使は神が知らないことを伝えるのではなく、神から何を、いつ、誰に為すべきか学知するのである。天使は神の真理に於いて自分たちが何を為すべきか、誰に、いつ、告知すべきかを見出すのである。私たちの祈りも同様に、私たちが何かを神に伝えるのではない。「あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ。」(マタ6:8)とあるように、前もって神は知っているのである。神は創造すべきものを知りたまふ故に創造されたのであり、創造してから後で知ったのではない。

「すべての被造物は創造される前にも、完成された後にも、同様に、神に知られている。」だから神の知と私たちの知は非常に異なる。神が賢明であることと存在が同じであると先の諸巻で示したのはこの違いである。私たちにとっては存在することは知ること、あるいは賢明であることと同じでは無い。それは、私たちは「たとえ知らなくても存在し得る。」からである。私たちの知があのおの知に似ていない様に、私たちの知から生まれる私たちの言葉も、御父の本質から生まれた神の御言に似ていない。御父の本質とは、知る父、知恵なる父である。

鏡におぼろに映ったものという前置きで、三位一体の神について人間の精神との類比で考察している。父なる神の本質は知であり知恵であり、すべての被造物はその知によって創造された。しかし、そのように考えると私たちの知とはまったく似ていないということもはっきりする。人間の知は常に変化するが、神の知は永遠に変わらない知恵であり、天地創造の以前からすべてを知っているという前提だからである。

14) 父から生まれた御言葉と私たちの内的に語る言葉は似ている。(14:23-24)

続いて、三位一体の神の父と子の関係について私たちの言葉が知識から生まれる考え方と類比的に考察する。

だから父なる神の御言は独り子であり、全体的に父に似て、等しく、神からの神であり、光からの光、知恵からの知恵であり、本質からの本質である。神の御言は全く父と同じであり、しかも父ではない。一方は御子であり他方は御父であるから。それゆえ、子は父の知るすべてのことを知る。しかし、子にとって知ることは存在することと同じく父に由来する。なぜなら、神の場合、知ることと存在することは一つであるから。それゆえ、父はその存在を子から受取るのではないように、その知も子から受取るのではない。したがって、父はあたかも御自身を語るように御言をすべてにおいて御自身に等しいものとして生むのである。もし彼が御言において、御自身においてよりも少なくか、より多く語るなら、彼は御自身を全き意味で完全に語らないことになる。

ここでこそ、「然り、然り、否、否」(マタ5:37)ということが最高の意味で認識される。御言を生んだ父の知において存在するものはみな、御自身のうちにも存在し、そこに存在しないものは御自身のうちにも存在しないからである。この御言は或る虚偽を決して持ちえない。なぜなら、御言はその存在の根拠(父)と同じようになるとなく存在するから。「はっきり言うておく。子は、父のなざることを見なければ、自分からは何事もできない。父がなざることはなんでも、子もそのとおりにする。」(ヨハ5:19)だから、御父と御子は互いに知る。つまり、父は生むことによって、子は生まれたことによって互いに知る。また、父と子の知、知恵、本質において、存在する全てのものを父と子のお二人は同時に見る。

あの私たちの言葉は、音声や音声の思惟を持たず、私たちが見ることによって内的に語るものの言葉であって、それゆえ、いかなる国語にも属さない。この言葉は、鏡におぼろに映った限りにおいて、神の御言にいくらかは似ている。というのは、この言葉は神の御言が父の知から生まれたように、私たちの知識から生まれるからである。しかし、どんなに似ていないか、考察するのに躊躇してはならない。

三位一体において父なる神の御言が独り子であることと、私たちの知識から生まれる内的な言葉がいくらか似ているという説明である。この類推から三位一体の神を考察することは、アウグスティヌスが言うように、たとえおぼろであっても信仰理解に有意義な考察であろう。

15) 内的な言葉はある種の精神に存在する旋回的な運動から生まれる。(15:24-25)

思惟の視観から内的な言葉がどのように生まれるかについて考察する。

私たちの知から生まれるものは知っている事柄だけであろうか。知らないことをもそれが真実だと思って語らないだろうか。疑って語る時も、疑っていると語る時は真実の言葉であるが、疑っていることが真実かどうか知らない。嘘を言う時は、虚偽と知りつつ言葉を語るという点では真実の言葉であり、嘘を告白する時、真実を語る。一方、神の御言は嘘を言い得ない。「はっきり言うておく。子は、父のなざることを見なければ、自分からは何事もできない。父がなざることはなんでも、子もそのとおりにする。」(ヨハ5:19)からである。神は、「然り、否」(コリⅡ1:19)はありえず、ただ『然り、然り』『否、否』(マタ5:37)である。

私たちが生きていることを知っていること、また、そこで神の似姿がより深く凝視されるべきである他の類似のものは、たとい常に知られているとはいえ、常には思惟されるわけではない。現在して、その本性に属して決して忘れないものでも、常には思惟されないので、私たちの言葉が私たちの思惟によって語られる時、どのようにこれらについて永遠の言葉が語られるのか見出すのは難しい。精神は知っていることを中止しないが何か他のことを思惟し始めるとき、このことを思惟しなくなるからである。

そこで次のようになる。もし精神においてある持続的な知は存在し得るが、同じ知の思惟が持続的であり得ず、そして私たちの真の内密な言葉は私たちの思惟によって

のみ語られ得るなら、神のみが持続的でご自身に等しく永遠な御言を持つと知解されるのである。そうでなければ、思惟の可能性そのものは、知られるものが思惟されな
いときでも、しかも真実に思惟され得るゆえに、知識そのものが持続的であるほどに
持続的な言葉であると言うべきであろう。

しかし、思惟の視観においてまだ形成されなかったものが、どうして言葉なのであ
ろうか。もし、まだ形相を持たず、しかも形相を持ち得るゆえに言葉と呼ばれるので
あるなら、言葉はそれから生まれる知識にどのように似ているのだろうか。それは言
葉は言葉であり得るゆえに、すでに言葉と呼ばれるべきであるといわれるようなもの
である。しかし言葉であり得るもの、したがって言葉の名に値するものは何であろうか。

私は言う。それは、私たちに見出されたり、私たちが思い出すままに、あるいはこれ、
あるいはあれと思惟する時、ある種の旋回運動によってあちこち向ける精神のある
ものである。この運動によって、私たちの知っているものに到達して真の言葉が生起す
るのである。その結果、各々のものが知られるように、また思惟される。言い換えると、
或る国語に属している声なくして、また声の思惟なくして、心において語られるので
ある。

このゆえに、形成される前にも、私たちの知識から形成され得る精神の或るもの、そ
れがいわば形成可能なものであるゆえに、すでに言葉とよぶべきであるということ
を認めるにしても、それはあの神の御言とはまったく似ていない。

思惟の視観は、ある種の繰り返される旋回運動によって私たちが知っているものに到
達する精神の働きである。この働きには普遍的な視観を形成する機能もあると言う。これ
を思惟の視観、ある種の旋回運動と表現し、別の所では「精神のまなざし。」⁹とも表現し
ている。後者の表現を用いるならば「精神の眼差しがあれこれ思惟し言葉を生む。」とな
るので、あたかも普遍的な視観は精神の眼差しが有するものようである。この「精神の眼
差し。」を「人格の眼差し。」と言い変えるならば、そこには神の似姿と重なる真の人間のイ
メージが出現してくるのである。人間の知識と言葉を神と御言の関係で類比的に説明しよ
うとする議論である。

16) 神は人間のように思惟から言葉を生むのではない。(16:25-26)

神の言葉と人間の言葉が生まれる過程の違いを説明する。

神の御言といわれるが、神の思惟といわれないのは、人間のようにある仕方で形相な
くして回転され得るような、いわば或る回転が神のなかにあると信じられないようにす
るためである。神の御子は神の思惟と言われず、神の御言葉と言われるのである。なぜ
なら私たちの思惟は私たちが知っている対象に到達し、そこから形成される時、真の言
葉であるから。それゆえ、神の御言葉は神の思惟なくしてあると理解されるべきである。
したがって、神の御言葉は形相なくしてもありえるような或る形相可能なものを持た
ない単純な形相そのものであると知解されるのである。勿論、聖書においても神の思

惟についての表現がある。しかし、それは神の忘却が語られるような言い方によるのであり¹⁰、たしかに神について忘却という表現は本来的な意味ではない。神に思惟は無く、忘却も無く、御言には形成可能性も無く、単純な形相そのものである。

それだから、私たちのおぼろな鏡のために、今、私たちの言葉が神と神の御言に対する不類似がどんなに大きく、私たちは本性的に彼に等しくないであろうということを承認しなければならない。造られた本性は創造する本性より小さいからである。鏡の覆いを取り除かれる時、私たちの思惟も行きつ戻りつしないで、すべての知識を、一瞥をもって同時に見るであろう。しかも、このことが生起するであろうときも、もしこのことが生起するなら、形成可能であった被造物は形成されるであろう。それが到達すべきであったその形相の完全を所有するであろう。それにも拘わらず、それは神の単純性と等しく置かれるべきではない。神においては、或る形成可能なものが形相を受け取り、あるいは再形成されるのではなく、[純粹]形相があり、また、非形相でもなく形成されたのでもなく、永遠で不可変的な実体がある。

人間の言葉が生成される時の複雑な過程が神にあるはずもなく、神の言葉と人間の言葉が生まれる過程が違うのは当然のことである。神は永遠に存在して変わることの無い単純な形相から真の言葉が生まれるので、思惟の視観というある種の精神の運動から生まれる人間の言葉とはまったく違うと語る。

【付録】 引用文献・注

- 1 [1]：訳者解題によれば、三位一体論の執筆期間は399年～421年、約22年間である。399年～405年に1～4巻、415年までに5巻～12巻前半、421年までに12巻後半～15巻を執筆しているとある。
- 2 称揚：[名]（スル）ほめたたえること。称賛。「善行を一する。」
- 3 観想：[名]（スル）①『仏』特定の対象に深く心を集中すること。観念。②『哲』[ギリシャ theoria；ラテンcontemplatio] 感官的知覚や行為の実践を離れて、対象を直観すること。テオーリア。
- 4 浄福：清らかな幸福。宗教の世界で、信仰によって得られると信じられている幸福。
- 5 「すべての霊」とあるので、自然の事物にある神秘的な力という一般的な意味。
- 6 寓喩：ある事物を直接的に表現するのではなく、他の事物によって暗示的に表現する方法の意、この表現方法によって創作された文学作品あるいは造形芸術作品を一般にアレゴリーと称する。寓意、寓喩、風喩ともいう。
- 7 「ところが、律法学者たちやファリサイ派の人々はあれこれと考え始めた。『神を冒瀆するこの男は何者だ。ただ神のほか、いったいだれが、罪を赦すことができるだろうか。』イエスは、彼らの考えを知って、お答えになった。『何を心の中で考えているのか。』（ルカ5：21-22）
- 8 [2] p41：この御子の受肉と人間の言葉の類比は「キリスト教の教え」第1巻13章にも同様の記述がありウェルギリウスを引用しているという注が付いている。ウェルギリウスはラテン文学において最も重視される古代ローマの詩人（B.C.70-19）である。
- 9 [1]：訳者も注でこの部分を「精神のまなざし」と理解している。しかし、「精神の眼差しが旋回的運動」とは直接記されていない。「精神のまなざし」については、第15巻9：11, 11：7, 12：23, 15：49他で、詳細に語られている。

- 10 「神はその嘆きを聞き、アブラハム、イサク、ヤコブとの契約を思い起こされた。」(出2:24) が一例である。このような聖書の表現は他にも多い。

謝辞

最後に、筆者にキリスト教社会福祉の講義の機会を与えてくださった浦和大学の諸先生方に心から感謝を申し上げたい。目の覚めるようなキリストの質問をしてくれた学生諸君、聖書に深い理解を持つ方々との貴重な対話、じっと聞いてくれた家族や古い友人たち、これらの人々との交流によって、ひとまずまとまったことに心より御礼申し上げる。

Summary

A Study on Augustine's Concept of the Trinity and Social Welfare
— Study Note 1 —

Shuichiro Kunori

The purpose of this study is to consider the contact point between the Trinity of Augustine and social welfare. Trinity, a doctrine of the basis for the Christianity, was demonstrated by him based on the “faith” and “reason” in ancient end-stage. He discussed the analogy of the Trinity with the human mind, showed the image of God within the human words and love. Because his Trinitarian theology is very useful for realistic and rational understanding of “faith”, it is expected to be a valuable resource if we try to discuss a basic theory of the Christian social welfare science based on “faith” and “reason.” In this paper, I reexamined argumentation of his Trinity theory (Vol. 15, Chapter 1 to 16). As a result, I found the several contact points between the Trinity theory and social welfare; a concrete representation of human dignity and diversity; a careful aspect of physical sensations.

Keywords Augustine, The Trinity, Social Welfare

(2015年11月12日受領)